



Title	高校英語教育における音読指導の位置づけ : 教師の ビリーフという観点から
Author(s)	石丸, 直子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 27- 36
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53328">https://doi.org/10.18910/53328</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 高校英語教育における音読指導の位置づけ

## —教師のビリーフという観点から—

石丸 直子

**要旨** 本研究では、公立高校と私立高校の英語教師 10 名を対象に、音読指導のビリーフに関して 4 ヶ月間の横断的調査を行い、質的研究（半構造化面接、教室観察）を用いて分析を行った。分析手法は半構造化面接を、木下（2003, 2007）が提唱する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの一部を用いて行い、教室観察は Clark and Peterson（1986）による教師の思考と行動のモデルを参考にして分析を行った。本研究は、高校英語教育の現状をふまえたうえで、教師への半構造化面接と教室観察という 2 つの視点から、英語教師が音読をどのように捉えているか実態を把握し、音読は教師によりとらえ方が異なっている現状があることを示す。

### 1 はじめに

音読は英語教師の指導方法のひとつである。授業で全く音読指導を行わない教師はほとんどおらず、重要な活動であるとみなされてきた（土屋, 2004）。また、後田（1982）によると、音読は 4 技能に発展する可能性を持つ重要な活動として位置づけられている。そして、文部科学省が平成 21 年に高等学校の外国語（英語）の学習指導要領を改定し、4 技能の重要性を強調する方針を示したため、音読の重要性はより一層高まってくるであろう。しかし、音読指導の手法、構成や指導法は英語教師個人の判断にゆだねられているのが現状である（鈴木・門田, 2012）。では、実際には音読指導は英語教師達の中でどのような指導として受け止められ、位置づけられているのであろうか。

言語教師が授業実践において指導法を選択する際に考慮される概念の 1 つに「教師のビリーフ」というものがある。教師が生徒であったときにやしなっただけの学習経験や、教職課程における経験、そして、教師を取り巻く環境から生まれる教師の信念、思い込みが「ビリーフ」として教師自身の思考過程や実践となって現れてくる（笹島・Borg, 2009）。教師が指導法を取り入れる際には、教師自身の言語能力や言語の習得過程における経験がビリーフとなり、思考過程となって影響を及ぼしている可能性がある。

こういった点をふまえ、本研究では、木下（2003, 2007）が提唱する、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified-Grounded Theory Approach）を用いて、教師のビリーフという観点から、音読指導を日本の高校英語教師がどうとらえており、学校現場においてどのように行っているのか探りたい。そこで現場の教員にインタビュー調査を行い、同意を得た数名の教員の授業を教室観察することを通じて、教師個人、教師同士の音読指導の認識の現状を横断的な視点で調査する。

## 2 定義

### 2.1 音読 (Oral Reading)

『音読』は黙読の対語だから、声に出して読むことは広く音読である (文部科学省)。

### 2.2 教師のビリーフ (Teachers' Beliefs)

語学教育とその教授法、語学学習とその学習方法、生徒あるいは教師の役割、教師の資質などに関して、教師個人が持つ信念 (笹島・Borg, 2009)。

## 3 先行研究

### 3.1 日本の英語教育における音読の歴史

日本における音読指導導入の経緯を見ると、江戸時代の寺子屋などで、国語の授業で素読が行われており、教師が読み方の手本を示し、そのあとについて児童全員が音読することは、近代化が進んだ明治時代以降でもよくみられる授業風景であった (門田, 2007)。のちに大正時代には外国語教育において、Palmer が 1922 年に来日し、Oral Method を普及させ、口頭での音声の反復練習を広めた (隈部・佐藤・若林・塩沢, 1980; 伊藤, 1984)。さらに、第二次世界大戦後には Fries が来日し、Oral Approach を広めた (隈部・佐藤・若林・塩沢, 1980; 伊藤, 1984)。これにより口頭での発声練習である音読は、国語教授法のみならず、外国語教授法においても普及した。教室での音読指導としては、教師が音声モデルとなる “Model Reading”、教師の後について生徒が声を出して一緒に読む “Chorus Reading” が集団授業においては広く用いられていた (隈部・佐藤・若林・塩沢 1980; 土屋 2004)。

### 3.2 音読指導の一般性と効用

上記のように、音読は江戸時代から現在においても広く一般的に用いられている指導手法の 1 つで、文章を読んで理解し、言語を習得する上で重要な活動である (土屋, 2004)。音読活動をすることの効果は、発音、イントネーション、リズムを身につけるのにとどまらない (後田, 1982)。語彙力と文法力、そして英文構造を反復することで身につける効果がある (後田, 1982)。このように、音読は言語能力を多方面から総合的に高めることができる可能性がある指導法として、幅広いメソッドが生み出され、教育現場では様々な手法が実践されている (國弘, 1999)。方法が多岐に渡るため音読指導を扱う目的は教師の指導環境や、英語教師が受け持つ科目によっても、音読の使用用途は変わる (鈴木・門田, 2012)。

### 3.3 現職言語教師の認知と実践

Burns (1996) は言語教師 6 名に対し、縦断的調査における教師のビリーフの変化について調査した。調査結果で Burns (1996) は、授業などで生徒－教師間でやりとりのある文脈レベルの教師思考として (1)組織文化についての考え、(2)言語、学習、学習者についての教師のビリーフ、(3)特定の指導活動についての答え、の 3 点をあげた。

また、Borg（2003）は、言語教師認知研究における文献レビューを通じて、教師認知を構成する上で、以下3点が外部要因として考慮されると述べている。(1)教師自身の言語学習経験、(2)教師になる過程での経験、(3)教室、授業での実践における経験。

Clark and Peterson（1986）は、教師思考の研究に関する文献レビューを通じて、「教師の思考過程」と「教師の思考と観察結果」における関係性のモデルを作成した（図1）。筆者らは、このモデルを用いて、思考と行動のどちらかを無視した研究に対して警告をし、「教えることのプロセスはこの2つの領域が一緒になり、互いに関連して検証されるときのみ十分に理解されるだろう<sup>1</sup>」と述べている。

### 3.4 リーディング指導における音読に関する教師のビリーフ研究

文字を音声化する授業活動、指導法は広く音読（Oral Reading）に位置づけられる。よって、文字を教えるリーディング指導の音読における教師のビリーフ研究が多く見られる。以下のようなものが挙げられる。Maggioni et al.（2015）は、リーディング指導における教師のビリーフ研究の文献レビューを行い、調査対象者は小・中学校の教師を対象の研究が中心であった。他にも、Welther（2002）は、米国の小学校の教師48名に、質問紙調査を行った。また、Hoffman & Kugle（1982）は、米国の小学校の教師35名に意識調査と授業観察を行った。

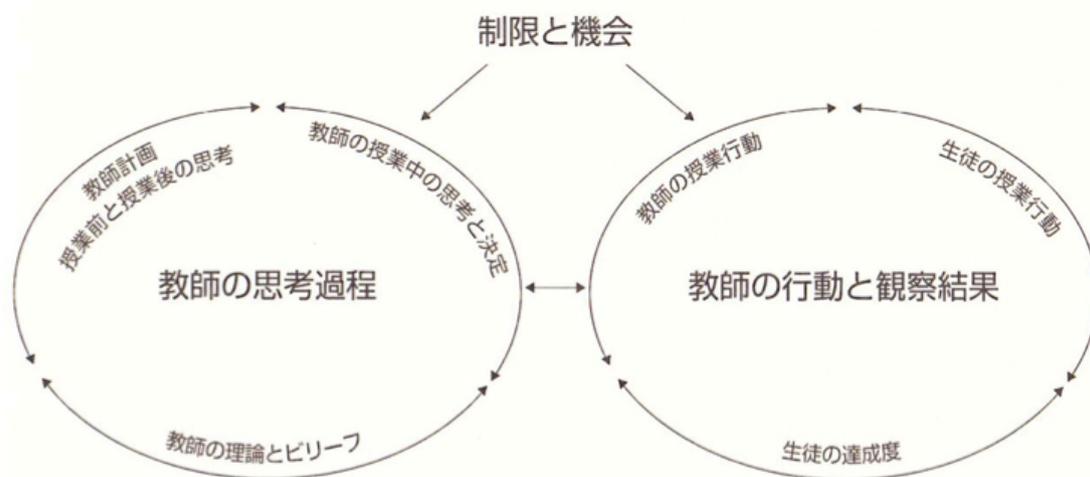


図1 Clark and Peterson（1986）による教師の思考と行動のモデル<sup>2</sup>

1 笹島（2009）訳

2 笹島・Borg（2009）第3章「言語教師認知研究の背景」3.14.「教師の思考過程」（2）（P.55）

### 3.5 先行研究のまとめ

先行研究から、日本の高校英語教育における、音読指導に関する教師のビリーフ研究において、次の3つの視点を考慮する必要がある。

1. 音読指導における教師のビリーフを、横断的に比較した研究は少ない
2. 言語活動が重んじられる小・中学校での音読指導に関する教師のビリーフに関する研究は多いが、高校の音読指導について言及している研究はあまり見当たらない
3. 英語教師が音読指導をどう捉えているか、どのような位置づけで用いているかを探るには、音読指導に関する教師のビリーフを調査する必要がある

## 4 研究目的

このような先行研究の結果を踏まえ、本研究は半構造化面接と教室観察を用いて、以下の3点を踏まえて調査を行う。

- ① 高校英語の音読指導について、教師がどう捉えているか、各教師の音読指導のビリーフを明確にし、教師同士のビリーフの関係性について探る
- ② 音読指導を行う際の環境、文脈要因と教師個人のビリーフの間に関連性はあるのか、あるのであれば具体的にどのようなものか明らかにする
- ③ 英語教師の授業風景を観察し、教師のビリーフが実践と一致しているのかを探り、明らかにする

## 5 調査概要

### 5.1 半構造化面接

本研究では、山口県の公立高校の英語教師8名と、岡山県の私立中高一貫教育校の英語教師2名の計10名を調査対象とした。各教師の教師経験は4年から46年で、各インタビューの所要時間は20から40分程度である。調査期間は2014年5月下旬から9月末までの約4ヶ月であり、横断的調査を行った。

本研究は、特定の指導法における個人の解釈を分析する研究であるため、学校現場という特定の場所における社会現象、社会的相互作用関係を理論的に分析でき、インタビュー構造やプロセスを理解するのに適しているグラウンデッド・セオリー・アプローチ (Glaser and Strauss, 1967) を参考にした。本研究では、言語データに根ざした分析者の解釈を、分析プロセスに積極的に取り入れている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (木下, 2003) の1部を使用した。

インタビューの分析手順は以下の通りである。(1)録音された面接記録の文字おこしを行い、逐語録を作成する。(2)逐語録の内容を発話者の意図を重視しながら意味ごとに切片化する。(3)切片化された発言を1つの具体例(ヴァリエーション)に分類し、概念を作成する。(4)概念作成の際には分析ワークシートを用いて概念名、定義、具体例(ヴァリエーション)、理論的メモを記述する。(5)作成した概念同士を比較し、似通った意味を持つ概念

をグループ化して、より抽象的なカテゴリー名をつける。(6)カテゴリーの内容の比較を行い、関連性を考慮したうえで半構造化面接の全体像を把握する。(7)カテゴリーと概念の相関図を作成し、面接の全体像を明らかにする。

また、調査を行った10名の教師には、面接の際には以下のような質問項目を用いた。

- ・「音読」と聞いて、どのような活動であるとお考えですか？
- ・「語、句、文章などの形で印刷されたり、手で書かれたものを声に出して読むこと」(門田 2007; 松村 2009) こういった活動を「音読」と呼んでいますか、それを授業で実践したことはありますか？
- ・音読を実践しているのはどの科目ですか？
- ・声を出して読ませるのが音読ですが、その音読活動にバリエーションはつけていますか？
- ・そのバリエーションのうち、効果的なものはどんなものだと思いますか？
- ・他の英語学習活動と比べて、どのくらいの頻度で音読活動を取り入れていますか？
- ・使用している教材に関してですが、教材のうちのどの部分を音読活動として取り入れていますか？
- ・どうやって音読に出会いましたか？
- ・ご自身の指導に音読はどのようなきっかけがあって導入しましたか？

これらの質問項目は、Borg (2003) の言語教師認知研究の文献レビューにおける、教師認知を構成する上で重要な3つの外部要因、(1)教師自身の言語学習経験、(2)教師になる過程での経験、(3)教室、授業での実践における経験と、Clark and Peterson (1986) による教師の思考と行動のモデルを参考にした。

## 5.2 教室観察

上記のインタビュー調査を実施した英語教員のうち、同意を得た5名の授業風景をビデオカメラ撮影または録音を行った。この5名のうち、教室観察記録中に音読指導を用いた4名の教師を対象に分析を行った。

以下が各授業実践の記録を分析した際の手順である。(1)半構造化面接の記録で最もその教師のビリーフを明確に示した発言を取り上げる、(2)授業実践でそのビリーフと関連性があるとみられる部分を選んで、具体的にどのような関連性があるかどうか詳細を確認した。

## 6 結果

### 6.1 半構造化面接

インタビューを分析した結果、7つの小カテゴリーと、14の概念が抽出された。7つの小カテゴリーの相互関係を検討した結果、3つの大カテゴリーに分類することができた。カテゴリーの相関関係を図1に示し、インタビュー全体の流れを明らかにした。

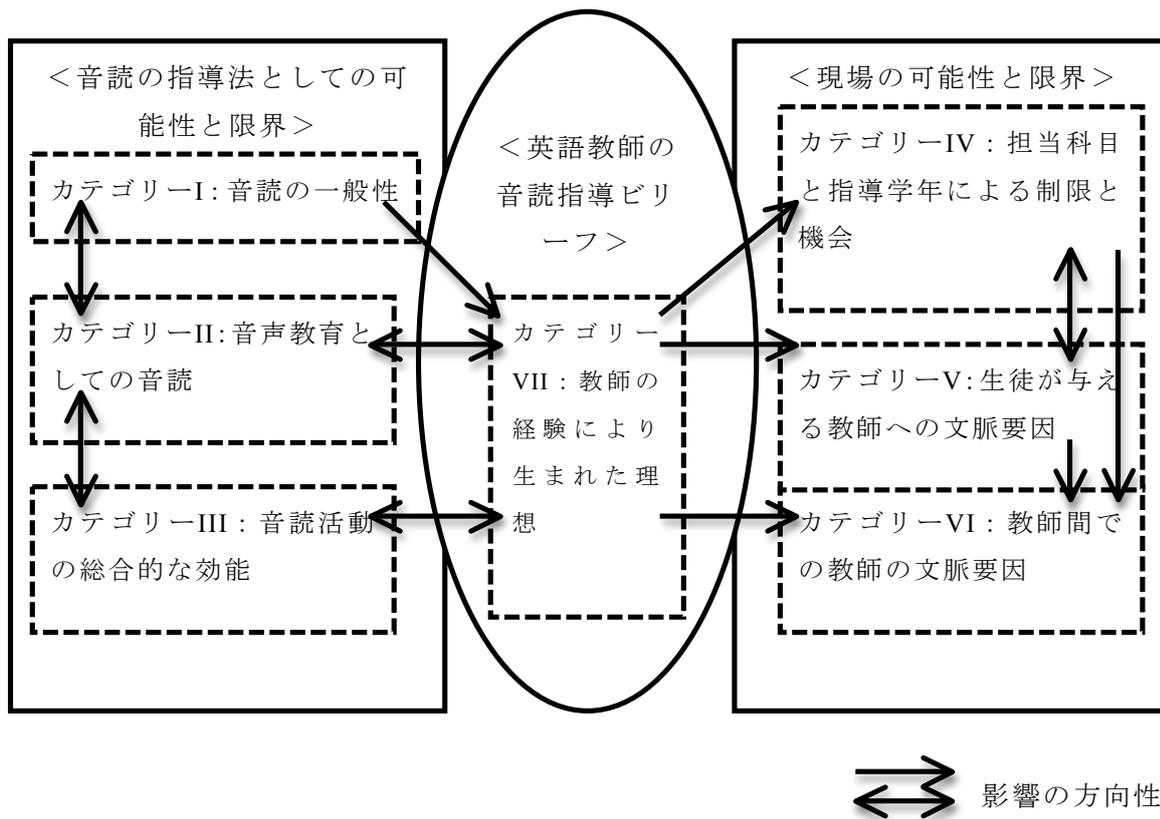


図1 英語教師の音読についての知見と解釈

表1 抽出したカテゴリーと概念の詳細

<p><u>カテゴリーI: 音読の一般性</u></p> <p>概念1 音読導入への迷いのなさ</p> <p><u>カテゴリーII: 音声教育としての音読</u></p> <p>概念2 発音の確認という側面</p> <p>概念3 音声学習としての音読</p> <p><u>カテゴリーIII: 音読活動の総合的な効能</u></p> <p>概念4 指導法としての総合的な要素と効用</p> <p>概念5 反復活動によるインプット</p> <p>概念6 発話、書き言葉へのアウトプット</p> <p><u>カテゴリーIV: 担当科目と指導学年による制限と機会</u></p> <p>概念7 担当科目と指導学年による制限</p> <p>概念8 担当科目と指導学年による機会</p>	<p><u>カテゴリーV: 生徒が与える教師への文脈要因</u></p> <p>概念9 生徒の授業態度による指導法の制限</p> <p>概念10 生徒の授業態度による指導法の工夫</p> <p><u>カテゴリーVI: 教師間での教師の文脈要因</u></p> <p>概念11 教師の連帯による制約</p> <p>概念12 教師の連帯による可能性</p> <p><u>カテゴリーVII: 教師の経験から生まれる理想</u></p> <p>概念13 学習経験から生まれる理想</p> <p>概念14 実践において生まれる理想</p>
---	--

図中の矢印は1つのカテゴリーが他のカテゴリーに影響を与えることを表しており、双方向の矢印はカテゴリーが相互に影響し合っていることを表している。概念の詳細は表1に示す。

## 6.2 教室観察

インタビュー調査をした教師のうち同意を得た5名の教師に、授業をビデオカメラ撮影、または録音で記録をした。そのうち記録中に音読指導を行った教師4名の授業実践を分析した。分析方法は、授業実践を記録した教師のインタビュー内容で、調査対象者の「音読指導におけるビリーフ」を明確に示している発話を取り上げ、教室観察においてそのビリーフに合致するとみられる部分を選び、見ていった。結果、4名の教師全員にビリーフと実践での一致が見られた。

音読に関するビリーフが異なったA先生とD先生の授業実践を取り上げる。

A先生はインタビューで「言語を習得するためにはしゃべることがすごく大事」と述べた。観察した授業「コミュニケーション英語I」では、教室英語（Classroom English）をA先生が積極的に用いる姿勢が見られた。また、授業中盤の教科書本文の「本文理解」の部分では、A先生が教科書の本文内容に関する英問英答を5つ黒板に書き、それを生徒に音読させて問題を解く時間を与えた。そして答え合わせの際には生徒に英語で問題の答えを発言させた。このように、積極的に英語を授業で用い、生徒に発言させている機会を与えていることから、ビリーフへの関連性がみられた。

D先生はインタビューで「科目によって必要だと思われるときに取り入れる」と述べた。観察した授業「英語表現I」では、教科書の英文の並べ替え問題を、生徒に黒板で解かせて答え合わせをした後にすべての英文をCDとD先生がモデル音声を示し、生徒に音読をさせた。しかし、これ以上のバリエーションは確認できなかった。このように、D先生の音読指導に多様なバリエーションが確認できず、形式的なものにとどまった。

## 7 考察

本研究では、音読指導について現場の教師がどのように捉えているか、探索的に調査を行った。結果、調査対象者は、自身の授業においてなんらかの形で本研究の定義に沿った音読指導を行っていることがわかった。また、授業においては Burns (1996) の研究結果と同じものが見られた。

文部科学省の新学習指導要領では音読に関する記載がリーディング指導の1部としてであるが、調査の結果、本研究での調査対象者は英語科における全ての教科で音読を実施していた。これは本研究で用いている、文部科学省の音読の定義が広いからだといえよう。調査対象者は、自身の授業においてなんらかの形でこの定義に沿った音読指導を行っているといえる。

また、学習者についての教師のビリーフは、指導法を教師が選択する上で重要なもので

あるといえる。本研究の調査で教師の指導は高校の特色により変わることがわかった。インタビューを通じて、調査者の1人（E先生）が、山口県の公立高校で教えている教師らは音読に対しては積極的な教師が多い、と述べた。なぜなら、生徒の学習姿勢が受け身であるゆえに、指導法に関して生徒が意見を出すことがあまりないという傾向が見られるからだという。

このような生徒の特徴は進路選択から現れていると考えることもできる。山口県の公立高校では、短大、専修各学校に進学する生徒が、進学する生徒のうち70%をしめる山口県の公立高校では、英語の勉強そのものの必要性を感じていない生徒が多いとみられる。一方、岡山県の私立中高一貫教育校では高校になると進路別にクラス分けがされ、進学志望の生徒の中にも標準クラス、難関大クラスというのがあり、4年制大学への進学者が進学志望の生徒のうち80%以上を占める。このため、英語の必要性を感じる生徒も多く、生徒の英語という教科への学習へのモチベーションが学校によって異なるといえる。このように、進路選択をする生徒の要望を教師は把握した上での指導を行わないといけないために、教師がどのような音読指導を行うかは、生徒の英語という科目そのものへの意識や、音読に対する生徒のビリーフがかわってくる。このように、教師における生徒の影響は大きい。Smith（1996）は教師において予測できない意思決定は、外部の要因である生徒によることもあり得るとしている。本研究では生徒の音読におけるビリーフを確認することができなかったため、今後の課題としたい。

同じ学校における教師間の音読指導の認識は同じものと違うものがある。同じものは、勤務先が同じであったときに、その学校の指針や生徒の性格などを受け、英語科の会議や日頃の授業における相談をしあったりすることで得られるものである。違いは、雇用形態における仕事のスケジュールの違いや、指導法そのものの捉え方に関してである。特に、指導法そのものの捉え方に関しては分析結果により、個人によって明確に異なるものと判明した。

このように、授業において生徒-教師間でやり取りのある文脈レベルでは Burns（1996）の研究結果(1)組織文化についての考え、(2)言語、学習、学習者についての教師のビリーフ、(3)特定の指導活動についての答え、と同じものが見られた。

Smith（1996）によると、学習者であったときに生まれたビリーフは、より体系的でしっかりとした教師教育を受けた際に修正が行われる。調査対象者の1人（I先生）は、積極的に音読指導に関する教師対象の研究会や、セミナーなどにも参加しているゆえに、自身の指導法においては、自身が学習者であったときの経験があまり反映されていない。一方で、こういった音読指導の手法や効果を体系的に学んだことを言及していない調査対象者は、自身の学習経験を重視する傾向がある。

また、波多野（2010）が、「教師自身が既存ビリーフを明確に認識する事によって、既存ビリーフに対して強化、加筆、深化、統合、棄却などの修正が施される」と述べていることに関連し、本研究では、インタビュー調査中にビリーフが変化した調査対象者がいた可

能性もあるといえる。インタビュー調査において、「音読を導入したきっかけは？」という問いに対し、「明確なきっかけはない」と答えた調査対象者が何名かいたが、インタビュー調査の中で自身が音読を好んで学習していたことを思い出したりし、インタビュー終盤では音読を取り入れた経緯を明確に示した調査対象者もいた。よって、本研究をきっかけとして、自身の音読指導観がより明確になった調査対象者がいることも示唆できる。

ビリーフと授業実践の内容には関連性が見られた。音読指導に本当に大切だというビリーフを持つ教師は進んで授業に取り入れ、目に見える行動や認識に反映されていた。一方で音読指導の効果を把握しながらも、結果的には形式的な指導となっていた教師は、教師自身の音読のビリーフが明確でないことがわかった。

## 8 おわりに

本研究は、高校英語教育の現状をふまえたうえで、教師への半構造化面接と教室観察という2つの視点から、英語教師が音読をどのように捉えているか実態を把握した。音読は生徒に発話させる、という行為全般を指す（文部科学省）ので、手軽に取り入れられる指導法だからこそ、自身の経験から音読指導法を選択するのか、指導法としての効果を理解した上で取り入れるのか、教師個々人の認識に左右されるため、音読に対する認識が問われる。音読活動は4技能の総合的な向上に繋がる（後田, 1982）。この音読の効果を、調査対象者の全員が把握しているとは言えないが、4技能の中うちの少なからずは1部分の言語能力には効果があると認識しているゆえに、音読は教師によりとらえ方が異なっている現状がある。

また、今後の課題としてあげられるのは、本研究では教師が受け持っている、生徒の音読におけるビリーフを確認することができなかった。教師のビリーフをより体系的に探ることができるため、今後は生徒の音読におけるビリーフも調査する必要があるといえる。そして、本研究において4技能を総合的に高めるための具体的な音読指導法を提示することができなかった点において、これからはさらなる研究と考察が必要である。

## 参考文献

- 伊藤健三 (1985). 『外国語の学習理論と日本の英語教育』「日本の英語教育 過去・現在・未来」. 中教出版株式会社.
- 隈部直光, 佐藤秀志, 若林俊輔, 塩沢利雄 (1980). 『英語教育の常識: 授業へのスタート』. 中教出版.
- 後田忠勝 (1982). 『中学校英語 読むことの指導-音読黙読から要点把握まで-』. 東京書籍.
- 門田修平 (2007). 『シャドーイングと音読の科学』. コスモピア株式会社.
- 木下康仁 (2003). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』. 弘文堂.

- 木下康仁 (2007). 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』. 弘文堂.
- 國弘正雄 (1999). 『英語の話し方』. たちばな出版.
- 笹島茂, Simon Borg (2009). 『言語教師認知の研究』. 開拓社.
- 鈴木寿一, 門田修平 (2012). 『フォニックスからシャドーイングまで 英語音読指導ハンドブック』. 大修館書店.
- 土屋澄男 (2004). 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読学習』. 研究社.
- 波多野五三 (2010). 『英語教師のビリーフに関する考察 –成長指標としての構成主義的授業観–』. 英語英米文学研究, 第 18 号
- 松村昌紀 (2009). 『英語教育を知る 58 の鍵』. 東京, 大修館書店.
- 文部科学省 (2010). 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』. 開隆堂出版.
- 文部科学省. 「CLARINET へようこそ 補習授業校教師のワンポイントアドバイス集 7. 音読・朗読」 <[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/002/003/002/007.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/003/002/007.htm)> (2014 年 12 月 11 日入手)
- Burns, A (1996). Staring all over again: From Teaching Adults to Teaching Beginners, *Teacher Learning in Language Teaching*, ed. By D. Freeman and J. C. Richards, 157-177, Cambridge University Press, Cambridge
- Clark, C. M. and P. L. Peterson. (1986). Teachers' Thought Processes, *Handbook of Research on Teaching*, 3rd (ed.), ed. By M. C. Wittrock, 255-296.
- Graden, E. C. (1996). How Language Teachers' Beliefs About Reading Instruction Are Mediated by Their Beliefs About Students, *Foreign Language Annals*, 29, No. 3, 387-395
- Glaser, B. G., Strauss, A. L. (1967). *The Discovery of Grounded Theory*. NJ: Transaction Publishers.
- Hoffman, J. V., Kugle, C. L. (1982). A study of theoretical Orientation to Reading and Its Relationship to teacher Verbal Feedback during Reading Instruction, *Feedback to Oral Reading Miscues. Part III. Final Report, National Inst. of Education (ED)*, Washington, DC.
- Maggioni, L., Fox, E and Patricia A, Alexander, The Catholic University of America, US and The University of Maryland, US. (2015). Beliefs about reading, test, and learning form text, *International Handbook of Research on Teacher Beliefs Chapter 20, Routledge 1 edition*, 353-369
- Smith, D. B. (1996). Teacher Decision Making in the Adult ESL Classroom, *Teacher Learning in Language teaching*, ed. By D. Freeman and J. C. Richards, 197-216
- Welther, M. M. (2002). Who's Reading Aloud? Teachers' Oral Reading Practices and Beliefs at the Elementary Level, *Research Project*, Kean University.